【論文】

児童用愛着パターン尺度の作成

山下明子・上地雄一郎
(NECソリューションイノベータ)・(岡山大学)

幼少期に安定した愛着が形成されなかった子どもは，さまざまな心の問題を抱える可能性がある。しかし，児童期の愛着についての知見はまだ浅く，愛着に問題を抱える子どもに対する適切な支援がなされているとは言い難い。そこで本研究では，Bowlbyと Ainsworthによる愛着の定義にできるだけ忠実に，児童期の安定型，アンビヴァレント型，回避型の愛着パターンを測定する質問紙尺度を作成することを目的とした。中・四国の小学校5校のうち、5〜6年生に作成した質問紙を実施した。その結果、安定型、回避型、アンビヴァレント型の3因子が抽出された。その後の検討で、信頼性・妥当性が確認された。また、5つのクラスターからは、「回避ーアンビヴァレント型」の児童のリスクの高さが示された。

キーワード：愛着，質問紙尺度，児童用愛着パターン尺度

問題と目的

愛着とは“愛情を伴い，苦痛な状態のときに安心と慰めの源となるような，特定の他者との情緒的絆”と定義される（上地, 2015)。また，Bowlby (1973) によると，愛着は“乳幼児期を過ぎると消え去るのではなく，青年期，成人期以降も持続し，人生において重要な役割を果たす”。

幼少期に安定した愛着が形成されなかった子どもは，さまざまな心の問題を抱える可能性がある。反応性愛着障害のような精神医学的疾患だけでなく，不安定型の愛着（回避型，アンビヴァレント型，無秩序型・無方向型）から生じる問題も軽視できない。しかし，児童期の愛着についての知見はまだ浅く，愛着に問題を抱える子どもに対する適切な支援がなされているとは言い難い。また，被虐待群など明らかな愛着障害を示す子どもだけでなく，一般群の中にも愛着に課題を抱える子どもは存在し，さまざまな困難を抱えていると考えられる。愛着が関与する諸問題やそれへの対応を考えるためには，個別の事例についての研究とともに，心理学的尺度を用いた調査研究も重要となる。しかし，乳幼児期，青年期，成人期と比べて児童期の愛着についての調査研究は遅れており，近年になって増えているものの，その数は相対的に少なく，大きな課題となっている。中尾・村上（2016a, b）によると，児童期の愛着を研究することは，愛着の生涯発達のプロセスやメカニズムを考えるうえでも重要である。児童期の愛着についての研究が遅れたのは，適切な尺度がなかったことも影響している。例えば，乳児に対してはストレンジ・シチュエーション法（Ainsworth et al., 1978）やアタッチメント・Qソート法（Waters & Deane, 1985）などがよく用いられている。青年・成人に対しては，半構造的な面接法である成人愛着面接（George et al., 1984）や諸種の質問紙尺度が用いられている。しかし，児童期の愛着を測定する尺度は，まだ少ない。本多（2002）によると，既存の尺度には，①母子分離場面を用いた実験的な観察法（Main & Cassidy, 1988），②ファンタジー遊びや人形を用いて愛着表象を測定する方法，③質問紙法があるが，①は7歳くらいまでしか適用できず，②は児童期中期以降には児童の興味を引き出しにく

いとされている。これに対して，質問紙は，児童期の初期には適用が困難であるが，児童期後期には実施可能であり，かつ比較的容易に多くの児童に対して実施することができる。

中尾・村上（2016b）によると，児童期の愛着を測定する質問紙としては，近年欧米では，「カーンズ・セキュリティ・スケール（KSS；Kerns, Klepac, & Cole, 1996）」と「コーピング方略質問紙（CSQ；Finnegan, Hodges, & Perry, 1996）」がよく用いられるようになった。KSSについては，中尾・村上（2016b）が日本語版を作成しているが，KSSでは愛着を安定性（安定か不安定か）という1次元でしか測定できず，安定型，アンビヴァレント型，回避型といった愛着パターンを取り扱うことはできない。これらの型に特徴的な行動パターンやそれをもたらす親子関係は異なっており，その型の子どもが心理的問題を呈した場合の専門家の対応も多少異なることから，愛着を多次元で測定できるほうが望ましいと考えられる。その点，CSQは，「とらわれ型コーピング」と「回避型コーピング」という2側面を測定することができるが，とらわれ型コーピングについては妥当性の証左が十分得られているとは言い難い（中尾・村上, 2016b）。また，質問文が非常に長く，アメリカの文化・社会の影響を強く受けているため，そのままでは日本語版を作成しにくいという問題がある。

日本では，本田（2002）が児童用の「母親に対する愛着尺度」を作成している。本多（2002）の尺度には「回避」と「両価性（不安）」という下位尺度があり，両価性または回避が低ければ安定型愛着の特徴である安心感が高いと想定されている。しかし，両価性または回避が低いことが愛着特有の安心感の高さと同一であるとは限らない。さらに，愛着対象者が「母親」に限定されている。Howes（1999）によれば，愛着は子どもの発達段階に応じて多様な「特定の他者」との間に生じるので，母親以外をも考慮した項目を作成する必要があると考えられる。また，安定型，回避型，アンビヴァレント型の特徴は，他のタイプに比べて相対的にそのような特徴が顕著であるということであり，他のタイプの特徴がまったくみられないということではない。だとすれば，安定型，回避型，アンビヴァレント型のそれぞれの特徴（傾向）を個別に測定できるほうがよいであろう。

次に，村上・櫻井（2014）は，愛着の機能に注目して，「近接の維持」「安全な避難場所」「分離苦悩」「安全基地」という下位尺度からなる「児童用アタッチメント機能尺度」を作成しているが，この尺度も子どもの愛着を安定型，アンビヴァレント型，回避型に分けて測定するものではない。

以上のようなレビューに基づいて，本研究では，BowlbyとAinsworthによる愛着の定義にできるだけ忠実に，児童期の安定型，アンビヴァレント型，回避型の愛着パターンを測定する質問紙尺度を作成することを目的とする。なお，愛着パターンについては，無秩序型という4つ目のパターンが確認されているが，これは安定型，アンビヴァレント型，回避型のいずれかと組み合わされて付与される型であり，本研究で作成する質問紙尺度では，安定型得点が低く，かつアンビヴァレント型と回避型の傾向が両方とも高いことを指標にして判別することができると考えられる（上地・牧野・山下・神谷, 2015）。

方法

1. 新たな愛着尺度

これまでに作成された他の愛着尺度から，本研究で作成する質問紙に適切な項目を収集した。

収集した項目を、筆者を含めて心理学を専攻する大学院生4名でKJ法によって整理した。これをもとに，児童用愛着パターン尺度試案を新たに作成した。項目作成にあたっては、項目が小学生が実感的に理解でき、回答しやすいものであるように文章を工夫した。また，文の末尾を「～ですか」などの柔らかい問いかけの形にすることで，心理的負担を軽減した。Howes（1999）は，愛着対象者となり得る者の基本的な3つの規準として，①身体的・情緒的ケアをしていること，②子どもの生活の中における存在として持続性・一貫性があること，③子どもに対して情緒的な投資をしていること，を挙げている。

これをもとに，質問項目で尋ねる愛着対象は，「おうちの中で，一番あなたの世話をしてくれる大人」として，自由選択にした。各項目では，愛着対象を「その人」と表現した。教示文は，「これから，「その人」ということばが出てきたら，あなたが上の質問で（　）の中に書いた人のことを思いうかべて，質問に答えてください。どの答えが良い，悪いということはありません。あなたが思うように，すなおに答えてください」とした。項目数は，安定型7項目，回避型7項目，アンビヴァレント型7項目の全21項目である。評定は5件法（1＝まったくちがう，2＝どちらかといえばちがう，3＝どちらかといえばそうだ，4＝だいたいそうだ，5＝まったくそうだ）とした。

この児童用愛着パターン尺度試案を小学生に実施し，因子分析を行い，各因子に負荷する項目群から下位尺度を構成した。次に，Cronbachのα係数から信頼性を検討した。そして，他の尺度との相関に基づいて妥当性を検討した。

2.　調査対象および調査方法

中・四国地方の小学校5校の4・5・6年生の回答のうち，欠損値のない719名を分析対象者とした。

3.　調査期間

2017年11月～2017年12月

4.　調査内容

(1)フェイスシート：「性別」「学年」「年齢」の回答を求めた。

(2)児童用愛着パターン尺度：本研究で作成した尺度を用いた。

(3)子ども用孤独感尺度（Fiver-LSC；西村・村上・櫻井, 2015）：児童の孤独感を測定する尺度（5項目）で，「孤独感」の1下位尺度から成る。

1)さみしさを感じる。

2)ひとりぼっちだと感じる。

3)まわりから，取りのこされていると感じる。

4)こまったときに、だれも助けてくれないと思う。

5)一緒に遊んでくれる人がいないと思う。

(4)改訂・自己知覚尺度日本語版（眞榮城・酒井・菅原ますみ・菅原健介，2007）から児童版「全体的自己価値感」：自己に対する全体的・全般的な自己評価を測定する，「全体的自己価値感」下位尺度（6項目）を使用した。

1)今のままの自分にとてもまんぞくしている。

2)一人の人として自分にまんぞくしている。

3)自分の生き方が好きではない。

4)自分のような人間が好きだ。

5)自分をふまんに思うことがよくある。

6)多くのことをするときの自分のやり方にまんぞくしていない。

(5)対人不安傾向尺度（松尾・新井，1998）から「否定的評価懸念」：対人場面において否定的な評価を受けることを懸念する傾向を測定する，「否定的評価懸念」下位尺度（7項目）を使用した。

1) 友だちが自分について悪口をいっていないか気になります。

2) 人がたくさんいるところでは，自分がいやな人と思われていないか，気になります。

3) 知らない人と会ったとき，その人が自分のことをいやな人と思わないか心配になります。

4) 自分のことがきらいな人が一人でもいることは，こわいことです。

5) みんなが私の顔を見て，笑っているような気がします。

6)みんなに笑われるのは，こわいことです。

7) いつもだれかが，自分のことを見ているようで心配です。

(6)簡易版児童用アタッチメント尺度（ECR-RC9；中尾・数井・村上，2016）：児童のアタッチメントの個人差を測定する尺度で，「回避」6項目，「不安」3項目の2下位尺度から成る。

1) 困ったことや心配ごとについて，たいてい，その人と話します。

2) いろいろなことを，その人と話し合います。

3) つらいときは，その人に話すと楽になります。

4) 気軽にその人をたよれます。

5) 心のおく深いところにあることを，その人に話す気がしません。

6) 自分のことについて「多く」をその人に話すことは，気が進みません。

7) その人は，自分をあまり好きではないかもしれない，と心配です。

8) 自分がその人のことを大切に思うのと同じくらいに，その人が自分を大切に思っているのか気になります。

9) 自分がその人に本当に愛されているのか心配です。

結果と考察

1. 因子分析の結果

因子分析（最尤法，エカマックス回転，N=719）を行った結果，3 因子が妥当と判断した。最終的に，不適切な項目を削除した，19 項目を児童用愛着パターン尺度として，Table1 に示す。各下位尺度の α 係数は，「安定型」は.87，「回避型」は.77，「アンビヴァレント型」は.60 となった。

Table 1　因子分析の結果

項目内容	因子 1	因子 2	因子 3	共通性
第1因子:「安定型」因子（α=.87）				
19. あなたは，「つらいことがあると，その人がはげましてくれるだろう」と思いますか。	.82	-.11	-.08	.69
16. あなたは，「ショックなことがあると，その人がなぐさめてくれるだろう」と思いますか。	.78	-.15	-.05	.63
13. あなたは，「なやみを話すと，その人はわかってくれるだろう」と思いますか。	.72	-.15	-.01	.55
11. あなたは，何かでなやんでいるとき，その人と話すと心がすっきりしますか。	.69	-.12	.11	.50
3. あなたは，つらいときや悲しいとき，その人を思いうかべると元気になりますか。	.67	-.09	.09	.46
9. あなたは，心配なことがあるとき，その人と一緒にいると安心しますか。	.65	-.05	.18	.46
6. あなたは，「自分が何かで失敗しても，その人はやさしくしてくれるだろう」と思いますか。	.54	-.13	.00	.31
第2因子:「回避型」因子（α=.77）				
15. あなたは，つらいことがあっても，その人にそれを知られないようにしますか。	-.14	.73	.06	.55
21. あなたは，なやんでいることをその人に知られたくないと思いますか。	-.16	.66	.00	.47
5. あなたは，その人に心配をかけたくないので，つらいことは話さないようにしますか。	-.01	.63	.06	.41
18. あなたは，はずかしいことをその人に話したくないと思いますか。	-.11	.49	.09	.26
8. あなたは，こまったことがあっても，その人にたよってはいけないと思いますか。	-.17	.48	.20	.30
7. あなたは，その人からきらわれるのがこわくて，本当の気持ちを言えないときがありますか。	.00	.44	.36	.47
10. あなたは，その人にあまえてはいけないと思いますか。	-.11	.38	.07	.16
第3因子:「アンビヴァレント型」因子（α=.60）				
17. あなたは，その人がいろいろなことを心配してくれないと腹が立ちますか。	.00	.00	.50	.25
20. あなたは，不安なときに，その人がそばにいてくれないと腹が立ちますか。	.11	-.05	.50	.27
4. あなたは，その人がいつもやさしくしてくれないとふまんですか。	.06	.09	.50	.26
12. あなたは，その人の態度が冷たいと，その人から完全にきらわれたかもしれないと心配になりますか。	.09	.26	.46	.29
14. あなたは，「その人から愛されていないんじゃないか」と心配することがありますか。	-.14	.25	.43	.26
因子寄与	3.57	2.43	1.41	
累積寄与率(%)				38.97

2.　性差と学年差の検討

児童用愛着パターン尺度における，「安定型」，「回避型」，「アンビヴァレント型」の得点（合計点÷項目数）の平均値と標準偏差を，男女別にTable 2に示した。

安定型得点においては性差が見られ，女子の得点が有意に高かった。回避型得点においても性差が見られ，男子の得点が有意に高かった。これは，小学校中高学年の男児にとって，母親や父親に接近することが社会的に推奨されていないためではないかと考えられる（本多，2002）。

次に，この愛着パターン尺度における，「安定型」，「回避型」，「アンビヴァレント型」の得点（合計点÷項目数）の平均値と標準偏差を，学年別にTable 3に示した。安定型得点においては学年差が見られ，4年生，5年生よりも6年生の得点が有意に低かった。これは，児童の発達に伴う愛着対象の変化が影響していると考えられる。乳幼児期を扱った発達心理学領域の研究では，母親を中心に，父，担母，保育者などの愛着対象が研究の対象とされ，青年期を扱った社会心理学領域では，恋人，友人，家族，一般他者などの愛着対象が研究の対象とされてきた。その中間にあたる児童期は愛着対象の移行期であると考えられている。つまり，父母が中心となる関係性から友達などとの関係性への移行期であると考えられている。このことから，この結果には，年齢が上がるにつれて，愛着対象が家庭外に移行した児童の存在が影響しているのかもしれない。

アンビヴァレント型についても，学年差が見られ，4年生よりも6年生の得点が有意に低かった。Finnegan et al.（1996）によるRelationship Stance Questionnaireの母親版において，小学4年生から中学2年生を対象に，年齢差を検討しているが，愛着のアンビヴァレント型と同義の「両価性」に関する得点は年齢とともに低下することが明らかにされていることからも，この結果は支持される。

Table 2 性別にみた愛着得点

	性別	人数	平均	標準偏差	t	多重比較
安定型	男	347	3.50	1.02	−4.11**	男＜女
	女	371	3.81	.97		
回避型	男	347	2.71	.87	3.87**	男＞女
	女	371	2.46	.89		
アンビヴァレント型	男	347	1.86	.72	n.s.	
	女	371	1.90	.70		

**p＜.01　N=718

Table 3 学年別にみた愛着得点

	学年	人数	平均	標準偏差	F	多重比較
安定型	4年生	252	3.82	.97		
	5年生	186	3.81	.92	13.47**	4年，5年＞6年
	6年生	281	3.42	1.03		
回避型	4年生	252	2.62	.89		
	5年生	186	2.59	.93	n.s.	
	6年生	281	2.54	.86		
アンビヴァレント型	4年生	252	1.96	.77		
	5年生	186	1.87	.63	3.08*	4年＞6年
	6年生	281	1.81	.69		

**p＜.01　*p＜.05　N=718

3. 妥当性の検討

児童用愛着パターン尺度と妥当性検討尺度の 3 つの下位尺度と，性別，学年の相関分析から明らかになったことを Table4 に示す。安定型の児童は，孤独感をあまり感じず，自己に対する全般的な自己価値観が肯定的であることが示唆された。回避型の児童は，孤独感を感じており，全般的自己に対する肯定的自己価値観が低いことが明らかとなった。そして，対人場面では，否定的な評価を受けることを懸念する傾向がみられた。アンビヴァレント型の児童は，孤独感を感じており，全般的自己に対する肯定的自己価値観が低いことが明らかとなった。そして，対人場面では，否定的な評価を受けることを懸念する傾向がみられた。安定型得点と ECR-RC9 の回避得点の間には中程度の負の相関がみられた。回避型得点と ECR-RC9 の回避得点との間，アンビヴァレント型得点と ECR-RC9 の不安得点との間には，どちらも中程度の正の相関が見られた。

4. クラスター分析による愛着群と妥当性検討尺度との相違

愛着得点に基づくクラスター分析からは，回答者が 5 つの群に分類された。5 つの愛着群と，妥当性検討尺度の 3 つの下位尺度による分散分析の結果から明らかになったことを Table 5，Figure 1 に示す。

(1) 安定高群：この群に属する者は，愛着が安定しているため，自己に対する肯定感が高く，対人関係においても不安が少ない傾向にある。そして，孤独感が低い傾向にある。

(2) 回避 - アンビヴァレント高群：この群に属する者は自己に対する肯定感が非常に低く，対人関係において不安が大きいことから，孤独感が非常に高い傾向にあると考えられる。

(3) 安定 - 不安定両高群：この群に属する者は，愛着の安定度が高いにも関わらず，不安定度も高い傾向にあると言える。愛着が不安定な面もあるため，自己に対する肯定感が低く，対人関係においても不安が高い傾向にある。

(4) 愛着非活性群：この群に属する者は，愛着が活性化されていないと考えられる。これは，愛着対象を問う教示文が「おうちの中で一番あなたの世話をしてくれる大人」であることから，回答された人物が必ずしも愛着対象ではない場合があることが影響していると推測できる。また、対人関係において不安を抱く傾向にある。

(5)平均群：この群に属する者は，愛着が平均的に安定しているが，同時に，不安定な傾向もあると考えられる。愛着がある程度安定しているため，孤独感をあまり抱かず，対人関係においても不安が高くない傾向にある。また，自己に対する肯定感も平均的な傾向にある。

Bowlby と Ainsworth があげた「安定型」，「回避型」，「アンビヴァレント型」は，そのような特徴が他のタイプに比べて相対的に顕著であるということであり，他のタイプの特徴がまったくみられないということではないから，上記のような諸群が存在することは，愛着の３類型論と矛盾する結果ではない。

Table 4 愛着と妥当性検討尺度の相関

	安定型	回避型	アンビヴァレント型
孤独感（*N*=407）	−.28**	.22**	.25**
全体的自己価値観（*N*=407）	.28**	−.29**	−.16**
否定的評価懸念（*N*=407）	−.09	.22**	.35**
ECR-RC9 回避（*N*=312）	−.65**	.46**	.12*
ECR-RC9 不安（*N*=312）	−.01	.33**	.51**

**p<.01 *p<.05

Table 5 愛着の各群における妥当性検討尺度得点（Z 得点）

	孤独感	全体的 自己価値感	否定的 評価懸念
安定高群	-.28	.36	-.15
回避 - アンビヴァレント高群	.58	-.55	.36
安定 - 不安定両高群	-.10	-.08	.22
愛着非活性群	-.01	-.02	-.21
平均群	-.09	.02	-.04

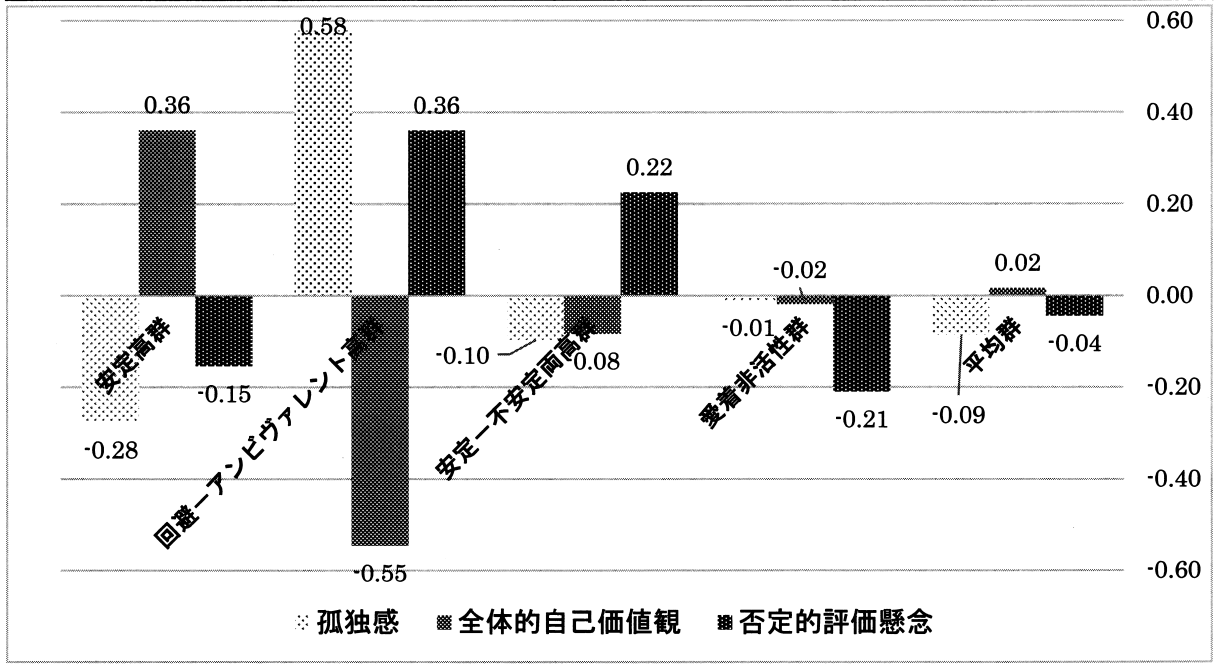

Figure 1 愛着の各群における妥当性検討尺度得点（Z 得点）

総合考察

最後に，本研究の課題を 2 つ示す。　第一の課題は，アンビヴァレント型の測定項目の内的整合性に問題があることである。因子分析の結果，アンビヴァレント型の測定を想定していた 2 項目が共通性.20 を下回ることが示された。そのため，アンビヴァレント型を測定する項目は 5 つに減ったのに加えて，アンビヴァレント型の α 係数は.60 という低い値になり，この 5 項目の内的整合性も高くないことが判明した。今後は，アンビヴァレント型を測定する項目を再考し，より内的整合性の高い項目群にしていく必要がある。純粋なアンビヴァレント型は，全体の 10%程度の人数であることと，児童期の愛着研究が少ないため，児童のアンビヴァレント傾向を適切に把握できていない可能性がある。今後は，児童のアンビヴァレント傾向を適切に理解し，より分かりやすい表現について，更に検討する必要がある。

第二の課題は，愛着パターン尺度において愛着対象特定の教示が不十分であったということである。本研究では，愛着対象を「おうちの中で一番あなたの世話をしてくれる大人」として，自由記述を求めた。その結果，回答欄に複数の人物を挙げた児童が多くみられた。愛着は，特定の他者との間に築かれる情緒的絆である。したがって，適切な愛着を測定するためには，質問紙調査の際には特定の一人の愛着対象を思い浮かべてもらう必要がある。また，本研究で回答された人物は，あくまで「おうちの中で一番あなたの世話をしてくれる大人」であることを忘れてはいけない。村上・

櫻井（2010）は，小学校高学年の児童において，学年が上がるにつれ，主たる愛着対象が母親から別の対象へと移行する可能性を示唆している。したがって，児童期において，子どもは対人関係を拡大させていくため，母親，父親に限定されない愛着対象を検討する必要がある（村上・櫻井，2010）。このことから，本研究で回答された人物は，児童の愛着対象ではない可能性も十分考えられる。これは，クラスターに分類した中に，愛着が活性化されていない「愛着非活性群」が存在していることにも，影響している可能性がある。この群に属する児童は，愛着対象が別に存在しているために，愛着が活性化されていないという結果になったのかもしれない。今後は，児童の愛着対象を適切に測定する項目の，更なる検討が必要であろう。

引用文献

Bowlby, J. (1973). *Attachment and loss Vol. II : Separation.* New York : Basic books.（黒田実郎・吉田恒子・横浜恵美子（訳）（1995）．母子関係の理論Ⅱ：分離不安　新版　岩崎学術出版社.）

Bowlby, J. (1979/1989). *The making and breaking of affectional bonds.* London : Routledge.（作田勉（監訳）（1981）．ボウルビイ母子関係入門　星和書店.）

Bowlby, J. (1980). *Attachment and loss Vol. III : Loss.* New York : Basic Books.（黒田実郎・吉田恒子・横浜恵三子（訳）（1991）．母子関係の理論Ⅲ：対象喪失　岩崎学術出版.）

Finnegan, R.A., Hodges, E.V.E., & Perry, D.G. (1996). Preoccupied and Avoidant Coping during Middle Childhood. *Child Development*, **67**, 1305-1886.

本多潤子　（2002）．児童の「母親に対する愛着」測定尺度の作成　カウンセリング研究，**35**，246-255.

Howe, D. (2011). *Attachment across the lifecourse : a brief introduction.* New York : Palgrave Macmillan.

上地雄一郎（2015）．メンタライジング・アプローチ入門――愛着理論を生かす心理療法――　北大路書房.

上地雄一郎・牧野史奈・山下明子・神谷真由美（2015）．青年・成人用愛着パターン尺度作成の試み　岡山大学大学院教育学研究科・心理教育相談室紀要，**13**，13-22.

眞榮城和美・酒井厚・菅原ますみ・菅原健介（2007）．改定・自己知覚尺度日本語版の作成――児童版・青年版・大学生版を対象として――　心理学研究，**78**，182-188.

村上達也・櫻井茂男（2010）．児童期のアタッチメント対象の把握――Function Based アプローチによる検討　筑波大学心理学研究，**40**，51-59.

村上達也・櫻井茂男　（2014）．児童期中・後期におけるアタッチメント・ネットワークを構成する成員の検討――児童用アタッチメント機能尺度を作成して――　教育心理学研究，**62**，24-37.

中尾達馬・数井みゆき・村上達也（2016）．簡易版児童用アタッチメント尺度（ECR-RC9）の作成（1）―――因子構造および内的整合性の確認――　日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集，311.

中尾達馬・村上達也（2016a）．簡易版児童用アタッチメント尺度（ECR-RC9）の作成（2）――収束的および弁別的妥当性の確認―――　日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集，312.

中尾達馬・村上達也（2016b）．　児童期中期におけるアタッチメントの安定性を測定する試み――カーンズ・セキュリティ・スケール（KSS）の日本語版作成――　発達心理学研究，**27**，72－82.

西村多久磨・村上達也・櫻井茂男（2015）．子ども用孤独感尺度（Five-LSC）の作成　心理学研究，**86**，368-373.